

本稿のもくじ

- ・教職大学院教員からのメッセージ
 - 時乗 順一郎 教授 「着眼大局 着手小局」
 - 足立 直之 准教授 「物事の背景に目を向ける」
- ・各コースの近況報告（講義場面から）
 - 学校経営コース 「自宅で全国の先生たちとつながったオンライン研修！」
 - 教育実践開発コース 「特色ある教育課程を目指して！地域とともにある学校づくり」
 - 特別支援教育コース 「学校全体で取り組む特別支援教育！」
- ・修了生との対談
 - 対談者 山口市立大歳小学校教諭 並河 銀野 先生

着眼大局 着手小局

先輩から教えていただいた「着眼大局 着手小局」という言葉。これは、物事全体を大きな視点から見て、大切なことを見抜き、小さなことからコツコツと実践するという意味とのこと。まずは、全体を眺め、大きな方向性を定めて、ゴールイメージを持つ。そこから具体的な行動を定め、細かなところにも心を配りながら実践していく。

常に「何のために？」と目的を意識し、「問題の本質はどこにあるのだろうか？」と大きな視点から見る。そして、それを解決するには、具体的にどのような行動をすればよいか考え、実際に行動をする。意外とやっつけがちなのは、細部にとらわれて、全体を見渡せなくなってしまうこと、目的を忘れて、手段にすぎない部分で止まってしまうこと。木を見て森を見ずって感じですかね。目的は何なのかを明確にして、そこから具体的にやることを決めなければ、実際にやっていることが、目的と離れてしまったり、手段が目的化してしまったりすることになりかねません。進むべき方向を確認しながら、歩き続けたいものです。



ときのり じゅんいちろう
時乗 順一郎 教授

物事の背景に目を向ける

学校では日々様々なことが起きています。しかし、その背景には人の思いや願い、考えが数多く存在しています。授業ひとつとってもそうです。美術の授業で風景画を描くとき。何を描くか、どの角度からどの大きさに風景を切り取るか、一番伝えたい思いは何か、など様々なことを思い巡らせ、想像します。そして、「ああでもない、こうでもない」を繰り返して、多くのアイデアから採用されたものだけが形として残り、作品は完成します。

そう考えると目に見えることの方が少ないのかもしれない。教育で大切だとされる努力、成功の裏側にある失敗、子ども同士の絆、学校という文化。学校現場を離れてみると、少し物事の背景に目が向くようになったような気がします。それと同時に大学で学ぶ意味がそこにあるように感じています。目に見える物事がどのような経緯でできているのかを想像し、創造の源となるエネルギーをしっかりと蓄えることが大学での学びでは大切なのではないのでしょうか。それを携え、学校でも活躍してほしいと思っています。



あだち なおゆき
足立 直之 准教授

自宅で全国の先生たちとつながったオンライン研修！

「学校組織マネジメント探求」の授業では、毎年、独立行政法人教職員支援機構(NITS)の研修講座を受講しています。今年度はNITS オンライン研修の「スクール・マネジメント」を学校経営コース、特別支援教育コース1年の8名が3日間にわたり受講しました。COVID-19の影響から自宅で受講するオンライン研修となりましたが、対面と変わらない充実した講義を受講することができ、全国の受講者ともつながることができました。講義や他県の先生方との対話を通して、学校経営の見方や考え方が広がったと実感しています。例えば、どの地域でも都市部への人口流出が課題であり、地域連携ではその地域の強みを活かした取組がされていること、工夫された組織マネジメントと人材育成によって特色ある学校づくりが実現できることなどを学ぶことができました。また、一日の研修のまとめとして、研修後に佐々木教授や2年院生と振り返りのオンラインミーティングを行い、その日の学びを深めることができました。ミドル・アップダウン・マネジメントによって管理職と教職員をつないで組織を活性化する役割を担うなど、この研修で学んだことを実践研究に活かしているところです。



まるやま しげお
丸山 茂生
(学校経営コース1年)

特色ある教育課程を目指して！地域とともにある学校づくり

「カリキュラムマネジメントの理論と実践 A・B」の授業では、現職教員である学校経営コースの院生(1年生)と学部卒である教育実践開発コースの院生(2年生)とが、グループワークやプレゼンテーション作成などを協働的に行いながら学校・地域連携カリキュラムについての学びを深めました。カリキュラム改革の変遷や、県内学校の特色ある実践事例をもとに、「社会に開かれた教育課程」を達成するためのマネジメントの在り方について考察をし、講義最終日には原籍校でのカリキュラムマネジメントの提案を行ないました。この講義を通して、「組織体制を確立する」「情報共有を具体化する」視点が身に付きました。また、学校という組織としていかに地域を巻き込みながら教育課程を編成していくのか、教育目標や目指すべき子ども像を地域や家庭とどのように共有していくのが教員としての課題であると感じています。今後はこの学びを生かし、学校の特色ある教育課程を語るができる教師となれるよう、広い視点をもって地域とともにある学校の姿を探求し続けていきます。



にしむら こうた
西村 幸大
(教育実践開発コース2年)

学校全体で取り組む特別支援教育！

「特別支援教育実践ケーススタディ」の講義では、特別支援教育コースの現職教員の院生とストレートマスターの院生と一緒に受講をし、学校コンサルテーションの理論や方法について理解を深めます。学校コンサルテーションとは教員が専門家から助言を受けながら、児童生徒に指導や支援を進めていくものです。

応用行動分析学に基づく学校コンサルテーションの事例に触れつつ、その成果や課題の分析を行います。さらに、学校コンサルテーションを発展・普及させていくための方略について検討します。また、原籍校や実習校での事例をもとに、自身の実践等についても省察する場面があります。受講生の人数も少ないため、アットホームな(特別支援教育コース2年)雰囲気で行われています。



むらかみ はるか
村上 遥

今後はこの講義の学びを生かし、学校現場で学校コンサルテーションを発展・普及させていくために尽力していきます。

修了生との対談

対談日 令和3年10月21日(木) 午後

—修了生紹介—

並河 銀野 先生

- ・ 山口市立大歳小学校教諭 1年生担任
- ・ 平成29年山口大学教育学部数学教育選修卒業
- ・ 平成29年山口大学教職大学院教育実践開発コース入学 第2期生
- ・ 実践研究題目「算数科における系統性を踏まえた授業デザイン—数学につながる算数の役割—」
- ・ 令和元年周南市立遠石小学校教諭 令和2年より現職

—対談者—



なみかわ ぎんや
並河 銀野 先生



まつむら ゆう
松村 悠
教育実践開発コース2年



よした ななこ
吉田 奈々子
特別支援教育コース1年



教職大学院を進路に選んだ、率直な思い



松村

最初に、「教職大学院に進学しようと思われた理由」をお聞かせください。



並河

大きく2つあります。

1つは、学校現場に入りながら学ぶ「オンザジョブトレーニング（OJT）」ができるからです。もう1つは、年間を通して、長い時間実習で小学校に入らせていただけるという部分に魅力を感じたからです。私は、中学・高校の数学科の免許と小学校の免許を取得したのですが、（教育学部）数学教育選修だったので、学部時代は、中学校教育に関わる勉強をずっとしていました。小学校での採用が決まったことから、小学校でさらにもう2年間、より高度な実践や実習をさせていただけることは非常に魅力的でした。



吉田

採用試験に合格して、周りの人が働き出す中で大学院に進学するということに迷いはありませんでしたか。



並河

それはすごく迷いました。採用されたらすぐに働くことをずっと思い描いてました。

しかし、私の中に小学校よりもずっと中学校の数学を勉強していたという負い目のようなものがありました。小学校の教員として現場に出るからにはもっと小学校の教育について勉強をしたいという気持ちが強くありました。教職大学院は、それができる環境だということを知った時には、進学したいという気持ちの方が強くなっていきました。周りの教育学部の学生の多くが4年間学問を修めたら就職するので、ちょっとイレギュラーにも感じました。

しかし、教職大学院は自分のためになると思い、家族にもその気持ちを伝え、理解をしてもらいました。自分自身で考えて決断できたので、決めてからはその迷いはなくなったように思います。



当時に想いを馳せて —教職大学院の魅力の普遍—



並河

私は教職大学院の2期生なので、院に関する情報が1期生の方の様子しか得られず、実習や研究も手探りの日々でした。お二人は、5・6期生ということになりますが、私の時よりは情報がある中で進学を判断されたのではないかと思います。決め手はどこにありましたか。



松村

理学部出身の僕の場合は、学部3年の時に「ちゃぶ台次世代コーホート」に参加させていただく中で教職大学院という存在を知りました。教育に関して勉強する機会がほとんどなかったのですが、教職大学院は実際に現場を経験しながら数学の授業も研究できるところが魅力だと感じて、ここに進学することに決めました。



吉田

私は、新たにできた特別支援教育コースに所属しているので、3期生に当たります。先輩方があまりおられないという意味では、並河先生と同じくあまり情報は多くない状況でした。私は今このコースにいるのは、研究がしたいというのが大きくあります。学部時代に、小学校総合選修にいたのですが、ボランティアや学習支援等を通じて、特別支援教育の分野について学ぼうと考えるようになりました。教職大学院では学校実習での実践と理論的な学びの往還を通して特別支援教育について深く学修できることを聞きました。今後、教員生活を送る上で必要な学びになると思い、最終的に教職大学院進学を決めた次第です。



話に上がった教育学部と山口県教育委員会、山口市教育委員会が協働で実施している「ちゃぶ台次世代コーホート」。現職の先生方や院生、学生が1つのちゃぶ台を囲むような雰囲気で行っている研修を月1回程度行っています。

「大学院を出たからこそ」を生かす



松村

教職大学院での2年間を通して、自信はつきましたか？



並河

自信はもちろんです、2年間の経験を踏まえ、実習で学んだことを思い出しながらスタートをできた部分は大きいと思います。

学級経営の手法として、声かけや学級のルールの決め方。そういった「あ、これいいな！」というものはたくさん使わせてもらいました。大学院生の立場は、ある程度自由に先生方の授業を見させてもらえると思います。あの時間は今思うと本当にありがたかったですし、一日その先生に付きっきりで見せてもらえる機会は働き出したらできない経験ですので本当に感謝しています。その経験は、1年目から生かされたように思います。

一方で、課題もあると思います。院卒だから大学の同期は教職3年目になります。3年目と同じだけの資質・能力があると言われると、担任を2年間経験している先生とでは差があると感じます。だからこそ、大学院で勉強しているからここは負けなとかここは譲れないぞ、頑張ってきたんだといったところをもつと、大学院を出ることの強みが出せるはずです。同期の中には、市の代表として公開授業をしている人もいます。そうした情報を得るとよい意味でのプレッシャーを感じることはありました。だからこそ、ここはやれるぞと言えるものを持っていくことが大事になるように思います。学部卒でそのまま働いてたら気づかなかっただろうなとかこういうこと考えられなかつただろうなっていうこと。例えば、学級の課題や学校の抱える問題へのアプローチの方法です。大学院を出たからこそわかる視点があればいいですね。2年間学校実習や研究をした状態で、立場としては新採。すごくいい状況で1年目を送ることができたと感謝しています。



修了してもなお、燈る「学び」への感謝



吉田

最後に、今回このインタビューを引き受けてくださった理由をお聞かせください。



並河

この対談のお話をいただいた時に、こうして修了生として呼んでもらえるのは、嬉しかったです。現役の院生の人たちに修了生としてメッセージをとという依頼内容でしたが、私としては本当に教職大学院に行って良かったなと思いますし、教職大学院に本当にお世話になったという気持ちがあったので私にできることがあれば何でもいいですよ、させてもらいますよというスタンスでした。

本当に、教職大学院は良かったという気持ちは強いです。もう1回4年に戻っても絶対、教職大学院の進学を選ぶと思います。教職大学院の週2日の学校実習を行うやり方はとてもよいと思います。本当に羨ましいです。1日中他の先生の授業見させていただけるのはありがたいと思うから、教職大学院に行って良かったと、お世話になったと思うので僕でよければいくらでも協力しますという感じでした。

院生 並河先生、貴重なお話ありがとうございました。



並河

ありがとうございました。

<対談を終えて・・・>

教職大学院に進学する際のメリットについて、多く話していただきました。実習では多くの先生方の授業を見られることが強みだと言われていたことが印象的でした。授業等での引き出しが増え、それに自分のアイデアを加えることで自分らしい教師像を確立していきたいです。卒業後、並河先生に近付けるよう成長していきたいです。（松村）

働きだした同級生の話を聞くほど、自分が2年後に「院卒」といえる程の力を蓄えて教壇にたてるだろうかと不安がありました。しかし並河先生との対談によって、今私たちの大学院生活の価値の高さに気付かされました。これから出会う子どものために、日常を大切にしていきたいです。（吉田）

今回、ストレートマスターの現役院生の願いが実現する形で修了生と学燈内での対談が実現しました。並河先生から教職大学院での2年間の学びがいかに質が高く、貴重であるかということや現場での様子を語ってもらったことで、多くの院生が勇気づけられたように思います。今回、30分に及ぶ対談のほんの一部しか掲載できないことが悔やまれるほどの熱いやりとりが行われました。ひたむきな思いを会場で聴きながら、現職教員としても大きな刺激をいただきました。（学校経営コース 1年）